

書評論文*

Stephen C. Levinson, *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*.

Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 2000, pp. xxii + 480,

ISBN 0-262-12218-9

評者 田中 廣明

1. はじめに

本書は、新グライス学派 (neo-Gricean) とされる著者が、Grice の語用論の立場から、発話に対する「好まれる (自然な) 解釈 (preferred interpretation)」がどのようにして産み出されるかについて、語用論と意味論、さらに、語用論と統語論の接点を論じた書である。新グライス学派と呼ばれる彼は、当然、グライス後 (pro-Gricean) とされる「関連性理論 (Relevance Theory)」とその理論に大きな違いを見せ、また事実、随所で関連性理論に対する批判も述べている。副題にもあるように、彼の関心事は、Grice 以降、その「推意 (implicature)」としての扱いに疑問がはさまれることがなかった、「一般化された会話の推意 (generalized conversational implicature: 以下 GCI)」がどのように産み出されるかという問題である。これには、関連性理論が、GCI を推意ではなく、「表意 (explicature)」として扱うという新機軸を打ち立てようとしていることへの反論という意味合いが含まれている。さらに、Levinson は Laurence Horn の推意に対する考え方にも大きく影響を受けていると思われる。

まず、本書の構成は以下の通りである。

Chapter 1 On the Notion of a Generalized Conversational Implicature

- 1.0 The Argument
- 1.1. Grice's Program
- 1.2 Three layers versus Two in the Theory of Communication
- 1.3 The Argument from Design: The Maxims as Heuristics
- 1.4 The Typology of GCIs
- 1.5 Non-monotonicity and Default Reasoning
- 1.6 Against Reduction of GCIs to Nonce Speaker-Meaning
- 1.7 Generalized Implicature and Stable Patterns Lexicalization
- 1.8 Conclusions

Chapter 2 The Phenomena

- 2.1 Introduction
- 2.2 The Q Principle
- 2.3 Exploring I-Inferences
- 2.4 M-Implicatures and Horn's Division of Labor

2.5 The Joint Effect of Q-, I- and M-Implicatures

Chapter 3 Generalized Conversational Implicature and the Semantics/Pragmatics Interface

- 3.1 Background
- 3.2 Received View: Semantics as Input to Pragmatics
- 3.3 Intrusive Constructions
- 3.4 The Argument from Reference
- 3.5 Some Implications
- 3.6 Conclusions

Chapter 4 Grammar and Implicature: Sentential Anaphora Reexamined

- 4.1 Grammar and Implicature
- 4.2 Implicature and Coreference
- 4.3 Binding Theory and Pragmatics
- 4.4 The B-then-A Account: Synthesis of the A-First and B-First Accounts
- 4.5 Conclusions

Chapter 5 Epilogue

- 5.1 Predictive Power of the Theory of GCIs
- 5.2 Presumptive Inference and General Reasoning
- 5.3 Role of GCIs in Linguistic Theory

第1章では、GCIがなぜ語用論の中で正当化されるのかについて、まずコミュニケーション理論における地位、その発見方法(heuristics)としての地位、その推論方法としての妥当性(非単調性・デフォルト推論)、さらにGCIを扱う理論上の装置(Q-, I-, M-Principle)などが、所々に関連性理論と比較されて語られている。第2章では、具体的にGCIをもとに様々なデータが分析されている。ここで問題になるのは、Q原理、I原理、M原理の優先順序である。Levinsonによれば、その優先順位は、 $Q > M > I$ とされている。第3章は、本書の中で、理論的に最も重要と思われる章である。従来、語用論は、意味論の出力として扱われてきた(The output of semantics is the input of pragmatics. (Gazdar 1979))。つまり、語用論とは、

- (1) Pragmatics = Utterance Meaning - Truth Conditional Meaning (語用論 = 発話の意味 - 真理条件的意味 : 意味論) (Gazdar 1979; Levinson 1983)

とされていたのであった。しかし、Levinsonは、Levinson(1983)自身の見解を修正し、「GCIが発話の真理条件(truth condition)に貢献する」とし、「意味論に対する語用論の侵入(pragmatic intrusion)」という新しい見解を提示している。これは、関連性理論の、語用論的推論が真理条件に貢献する、つまり、表意を構成するという見解と一見同じように見えるかもしれない。しかし、Levinsonは、最終的には、意味論を豊富にする立場を取っているのである。関連性理論の、意味論を小さくして、語用論を大きくす

る立場とは、大きく異なることになる。第4章は、統語現象と語用論の関わりについて述べている。Chomsky(1981)の束縛理論(Binding theory)の束縛条件(binding condition)は、統語現象ではなく、それにもっとも好まれる(自然な)解釈を与えているのは、GCIであるとしている。ただし、この章の前半と後半の主張にずれがあるのが、おしまれる。第5章は、GCIの言語理論の中での役割について述べている。

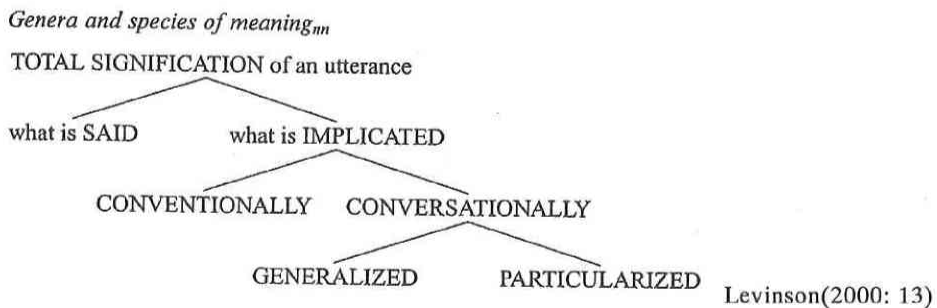
以下では、主として、第1, 2, 3章の主張について見ていくことにする。

2. GCIについて

2.1. GCIとは

よく知られているように、Grice(1975, 1989)は、発話の意味を、what is said (言われている部分)と what is implicated (推意されている部分)に分けた。その中で、推意されている部分を、規約的(conventional)と会話的(conversational)に分け、さらに、会話的な推意を、特定のコンテキストによらない「一般化された会話の推意(generalized conversational implicature: GCI)」と特定のコンテキストの中で生じる「特定の会話の推意(particularized conversational implicature: PCI)」に分けた。

(1)



例えば、次の(2)(3)のAに対するBの返事は、PCIでは‘It must be late’と‘Perhaps John has already left’を推意させるが、GCIのレベルでは、同じ‘Not all of the guests are already leaving’を推意させることになる。

(2) Context 1

A: “What time is it?”

B: “Some of the guests are already leaving.”

PCI: ‘It must be late.’

GCI: ‘Not all of the guests are already leaving.’

(3) Context 2

A: "Where is John?" B: "Some of the guests are already leaving."

PCI: 'Perhaps John has already left.'

GCI: 'Not all of the guests are already leaving.'

さらに、(4)(5)のように同じ不定冠詞の a を使った文でも、GCI が異なるものもある。

(4) "I saw a woman in my office."

GCI: 'I saw someone other than my wife/girlfriend/mother/etc.' (Q 推意)

(5) "I cut a finger."

GCI: 'I cut my finger.' (I 推意) ¹

Levinson は、(2)(3)(4)の GCI は、Grice の量の格率の一番目「要求される限りの情報を述べよ」、つまり「最大限の情報を述べよ」から、(それ以上述べても良かったはずであるが、述べていないので) それ以上は当てはまらないことを述べる推意である。例えば、(2)(3)では some より all が強く、(4)では a より the (この場合は、my wife などの定表現) の方が強い。これを Horn 尺度(Horn scale)で言うと、<S, W> (S は情報量の強い表現、W は弱い表現) のうち、W を使用することによって S は成立しないことを述べる推意である。Levinson はこの推意を「Q 推意」と呼び、Horn(1984, 1989) の言う Q-based implicature とほぼ同義である。

(5)はどうであろうか。これは、Grice の量の格率の二番目「要求されている以上の情報は言うな」、つまり話し手の側から言えば、「必要最小限の情報ですませる」ことが条件であるが、聞き手の側から言えば、「そこからできるだけ多くの(特定のな、典型的な)情報を引き出す」ことが必要となってくる。Levinson はこれを情報量の Informativeness からとった「I 推意」としている。これは、Horn(1984, 1989)では、関係の格率(Maxim of Relation)からの R-based implicature と呼ばれる。Horn(1984)は、要求された以上の情報を述べれば、当面の話題に関係のない題材を含めることになり、関係の格率からこの推意が生じると考えている。

(4)と(5)の違いを考えてみよう。I slept on a boat/in a car yesterday.と言うと、(4)と同じように、「そのボート/車は私のではない」という Q 推意が生じる。これは、on my boat/in my car と言えば言えたのに、あえて、弱い方の a boat/a car と言ったため、強い方ではないという推論が働くためである。一方、(5)を I cut my finger.とすればどうなるであろうか。Horn(1984)によれば、これでは、私には指が一本しかないことになり、

Q 推意働かない。そのため、弱い方の *a finger* で強い方の *my finger* を推論させる I 推意働くことになる。Horn は、一貫して、Horn 尺度が形成される (S が W を論理的に含意(entail)する) 場合は、Q 推意が生じると考えており、そのときは、Q 推意は I 推意 (Horn では、R-based implicature) に優先する。しかし、最大限の情報が、最小限の当たり前のことしか言っていないような場合、Q 推意より I 推意が優先するとされる (Levinson の解釈については、以下を参照)。

Levinson の提唱するもう一つの推意 (M 推意) をみてみよう。

- (6) a. Bill stopped the car. (I 推意→普通に足でブレーキを踏んで車を止めた)
b. Bill caused the car to stop. (M 推意→緊急にブレーキを踏んで、普通でない止め方をした)
- (7) The corners of Sue's lips turned slightly upward. (M 推意→スーは正確に言うと言っていない)

M 推意は、「冗長な、普通でない有標の表現を用いると、普通でない状況を述べる」ことをいう。M 推意の M は Grice の「様態の格率(Maxims of Manner)」から来ている。様態の格率とは、概略、「表現の明瞭さを求めよ」という格率であり、M 推意はこれを破った明瞭でない、冗長な、有標表現のことを述べている。Horn(1984, 1989: 197ff) では、これは Q 推意の延長線上にあるとされている。すなわち、有標の表現は無標の表現ではないことになり、無標の表現が伝えられなかった意味を伝えていることになる。

以上、Q 推意、I 推意、M 推意をみてきた。では、Levinson はこれらを Grice の格率(maxims)と同じように考えているのであろうか。また、これらの推意の優先順位はどうであろうか。

2.2. The Maxims as Heuristics

Levinson は、Grice のように、格率を話し手の行動規範ではなく、「推意の発見方法(heuristics)」と考えている (西山佑司 p.c.)。以下のような発見方法である。

(8) Heuristic 1:

What isn't said isn't. → Q 推意: What you do not say is not the case.

(8)は、Q 推意を産み出す推論である。「言われていないことは、正しくない」ということで、There is a blue pyramid on the red cone. (赤い円錐の上に青い角錐がのっている)

る)といえ、‘There is not a cone on the red cube.’とか、‘There is not a red pyramid on the red cube.’という推論が認可される。ただし、この推論が許されるためには、前者では、block (積み木)の世界で{cones, pyramids, cube}という対照物(oppositions)が必要となり、後者では、角錐の中で{red, blue}という色の対照が必要となる。それぞれの対象物が際だって(salient)いなければならない。(2)(3)の<all, some>という尺度で考えると、not allが推意されるためには、someと対照的なallが確立されていなければならないということなる。

(9) Heuristic 2:

What simply described is stereotypically exemplified.→I 推意

(9)は、I 推意を産み出す推論である。「単純に述べられたことは、典型的(定型的)な例を示す」ということで、(5)(6a)にあたる。The blue pyramid is on the red cube. (青い角錐は、赤い立方体の上にある)といえ、角錐は立方体に直接支えられている、つまり、最も典型的な置かれ方であることが述べられる。ただし、ここで重要なのは、それとは反対の、ただし書きがつかないかない限りという条件がある。

(10) Heuristic 3:

What's said in abnormal way, isn't normal.→M 推意

(10)は、M 推意を産み出す推論である。「普通でないように言われたことは、普通でない意味になる」というものである。The blues cuboid block is supported by the red cube. (青のさいころ形の(立方体状の)積み木は、赤の立方体によって支えられている)といえ、‘The blues block is not, strictly, a cube’とか‘The blue block is not directly or centrally or stably supported by the red cube.’という推意を許す。前者は、立方体の性質が、cuboidとcubeで有標と無標の対立になっている点、後者は、supported byと通常のonが有標と無標の対立になっている点を使った推論である。

2.3. GCIの優先順位

Horn や Levinson に対して以前から指摘されてきたことであるが、Q 推意、I 推意、M 推意の優先順位はどうなっているのかという問題がある。特に、一見したところ、Q 推意、M 推意と I 推意は全く反対の方向に向いているように見える(また事実そうである)からである。これに対し Horn(1984, 1989: 177ff)は、Division of Pragmatic Labor (語用論的労力の分業)という概念で説明を加え、Levinson は、以下のような順序立

てを考えている。

(11) $Q > M > I$ ($>$ は、推意が両立しなければ、左側の推意が優先されるという意味)

Q 推意と M 推意は、上述したように同じ範疇に属する。つまり、それぞれ、対立する項目 (Q の場合は尺度で上位の項目、M の場合は無標の項目) が成り立たないと述べる推論である。両方とも否定的な推論である。その点で、Q 推意と M 推意は、Levinson は「メタ言語的」と考えている。つまり、対立する言い方ができたのにそうしなかったと暗示することにより、対立する項目に言及しているからである。それゆえ、‘You didn’t eat SOME of the cookies, you ate ALL of them.’のようなメタ言語否定が可能となる。これに対し、I 推意は、無標の (あるいは尺度上で下位の) 項目が情報的に豊富な、またステレオタイプの (典型的、定型的) な解釈を許すというだけであるため、メタ言語的ではない。尺度上、上位の項目には言及しないからである。では、なぜ、Q と M の方が優先されるのかについては、Levinson は明確ではない。単に、以下のように示唆しているのみである。

(12) It would be essential to be able to utilize the resources of the language in order to indicate that the normal, stereotypical, rich presumptions about the world DO NOT HOLD: and that is what ordering Q and M before I achieves. (emphasis mine)

(Levinson 2000: 40)

Horn の「語用論的労力の分業」に示されているように、Q、M と I はお互いに補集合をなす。まず、Horn 尺度 ($< S, W >$) が存在し、S と W が同じ意味関係を持つ、同じように語彙化された対照的な項目の集合であれば、Q は I に優先する。その他の場合は、I が生じるが、ただし、無標の表現を用いても良かったのに、あえて有標の表現を用いれば M が生じる。その時、M は無標の表現 (I 推意) から生じていたはずの補集合をなす (Levinson 2000: 157)。

2.4. まとめ

以上をまとめたのが、以下の表である。

(13)

Table 1.1
Diagnostics for the three types of GCI

<i>Corresponding terminologies</i>			
Present book ¹	Q	M	I
Gricean maxims	Q1	M1 & M4	Q2
Horn's (1984) terms	Q	Q	R
Levinson's (1985/7) terms ²	Q	Q/M	I
<i>Properties of each type</i>			
Negative inference	yes	yes	no
Metalinguistic basis	yes	yes	no
Contrast between			
semantically strong/weak	yes	no	N/A
synonymous surface forms	no	yes	N/A
Within the scope of metalinguistic negation	yes	yes	no
Inference to stereotype	no	no	yes
Overriding GCIs	none	Q	Q, M

Levinson (2000: 41)

2.5. GCI の位置づけと推論の種類

上記で GCI と PCI の違いを簡単にみた。この点が、新グライス学派と関連性理論の大きく違う点である。誤解を恐れずに言うと、推意に関しては、Horn, Levinson の新グライス学派は GCI を、関連性理論は PCI を考察の対象にしている。これは、Levinson が関連性理論を 'nonce or once-off' (その場限りの、臨時の) と呼んでいるように、扱う意味が異なると考えているためである。

Grice の「非自然的な意味」(meaning_{nn}: nonnatural meaning)は、関連性理論では、形を変えて、またより豊富な概念で、「意図明示的」(ostensive)という言葉で表されている。このことは、発話の意味を考えてみた場合、まず「表現の持つ意味(a level of sentence meaning)」プラス「話し手の意味(a level of speaker meaning)」を聞き手がどのように解釈するか重点を置いて考えると考えることができる。Levinson は、これを「発話トークンの意味」と呼び、関連性理論は 'nonce or once-off inferences made in actual contexts by actual recipients with all of the rich particularities' (その豊富な特質をすべて兼ね備えた実際のコンテクストで、実際の聞き手(発話の受領者)によってなされるその場限りの推論)を扱っていると考えている。

これに対し、Levinson は GCI を、上記の 2 つの意味プラス「発話タイプの意味(utterance meaning)」と考えている。「発話タイプの意味」とは、話し手の意図を直接

(17) α (WEAK): $M(\alpha$ (not STRONG))

α (not STRONG)

ただ、問題なのは、弱い項を含む α (例えば some) と言って、それが強くない項を含む α (例えば not all) という既知想定と一致するのかどうかである。もちろん我々の持つ既知想定は日々更新しているものであり、この not STRONG (not all) という帰結が合わなくなれば、変えていかななくてはならない。その点は理解できるようにしても、はたして、タイプとして、デフォルト的に我々は、not STRONG という既知想定を持っているのであろうかという問題が浮上する。Q 推意については、以下で述べるように、関連性理論そのほかから、厳しい反論があり、今後の議論の発展が待たれる。

推論には、よく知られているように、演繹(deduction)、帰納(induction)、仮説設定(abduction)などがあり、Levinson は、関連性理論がグライスの言う PCI しか推意として認めないことに疑問を持ち、その際の推論が演繹法(三段論法)のみであることから、関連性理論の推論を monotonic (単調性) なものであると批判している。詳しくは、児玉(2002)を参照されたい。

3. 意味論への語用論の侵入 (Pragmatic Intrusion)

上述したように Levinson は、本書で、「GCI は発話の真理条件(truth condition)に貢献する」と新機軸を提出している。これは、「語用論的意味=発話の意味-真理条件的意味」としていた Levinson(1983)の立場を大きく変えるものである。これには、関連性理論の表意(explicature)に対する立場を明確にするという意図がうかがえる。関連性理論では、GCI は推意 (implicature) ではなく、実は表意(explicature)である (Carston 1988, 2003)とされており、現在、Carston(2002)などで、Levinson に対する批判がなされているところである。関連性理論では、表意は、(i)一義化(disambiguation)、(ii)意味充足(saturation)、(iii)自由富化(free enrichment)、(iv)アドホック概念構築という4つの方策で構成されており、それぞれが、真理条件に貢献するとされる(詳しくは、武内(2002), Carston(2002)を参照)。これは、Levinson の立場と方向性が逆で、最小の意味論でもって、語用論に大きな力を与えていることになる。Levinson は、これと逆の立場を取る。

彼の考えでは、本書の第3章に詳しく述べられているように、and の意味を I 推意で and then に富化(enrich)して、その上で、(and を含む)二つの文を結んだ better than 複文の真理値が判断できるとされる。some が not all を Q 推意する場合も同じである。

(18) "Driving home and drinking three beers is better than drinking three beers and

driving home.”

I 推意で富化された文：‘Driving home *and then* drinking three beers is better than drinking three beers *and then* driving home.’

(19) “Eating some of the cookies is better than eating all of them.”

(20) ?”Being a bachelor is better than being an unmarried person.”

(18)は、and を and then ととらなければ、全体の真理値が判断できない。(19)も同様である。もし、意味論的に同義の表現をもってくると(20)のように不自然という判断がなされる。このような better than 構文の存在は、Grice が What is said と What is implicated を分けて考えた当時から指摘されていたようである。つまり、Grice は、当初は単に What is said の部分だけで、真理値が判断できると考えていたと思われ、そうすると、and の意味に真理値が判断できる意味を多義に認めなければならなくなる。たとえ、推意の部分を真理値に寄与できると考えても、Grice の 2 分法では、推意は What is said の上に構築されるものであり、まだ真理値が決まらない What is said に推意をプラスして、真理値を決定して、What is said とするのでは、循環論に終わってしまうと言うのが、従来から批判されてきたところである。Levinson はこれを Grice’s Circle (グライスの循環論) と呼び、その解消方法として、推意の中でも、GCI のみを真理値に貢献できるものとした。なぜなら、GCI には、語用論的に、いつでも、解消できるコードがあるからである。

このコードがあるかどうか、関連性理論の表意の構築と大きく違いを見せる(児玉 2002)。武内(2002)は、「Carston(2002)は and と not についてそれぞれ独立した章立てで、最小の意味論を維持し、話し手が伝達しようとした命題内容(表意)へいたる道のりを丁寧にデモンストレーションしてみせる」と述べているが、その背後にあるのは、関連性という道具立て一つであり、取り消し可能性(cancelability)の問題など、個々の事態に対応する、道具立てが不足しているように感じられる。

表意に対する見方をまとめたのが次の表(21)である(Levinson のこの表に対する見方の批判については、Carston(2002 Ch. 2)を参照)。また、Levinson の pragmatic intrusion の全体図をまとめたのが、(22)の図式である。Levinson は、ここで語用論の貢献を presemantic と postsemantic に分け、presemantic の貢献を GCI に担わせている。postsemantic には、従来のアイロニーなどの tropes を含めているが、その扱いについては言及はない。

(21)

Table 3.1
Terminologies in the domain between “what is said” and “what is implicated”

<i>Author</i>	<i>Semantic Representation</i>	<i>Deictic & reference resolution</i>	<i>Minimal proposition</i>	<i>Enriched proposition</i>	<i>Additional propositions</i>
Grice 1989	“What is said”			“Implicature”	
Sperber & Wilson 1986	“Semantics”	“Explicature”			“Implicature”
Carston 1988	“Semantics”	“Explicature”			“Implicature”
	“What is said”				
Recanati 1989	“What is said”				
	“Sentence meaning”	“Explicature”			
Levinson 1988b	“What is said”				
	“The coded”	“Implicature”			
Bach 1994	“What is said”		“Implicature”		“Implicature”

Levinson(2000: 195)

(22)

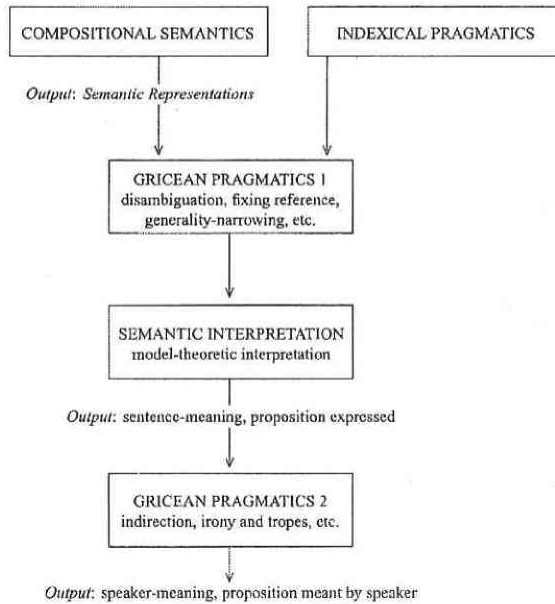


Figure 3.2
Presemantic and postsemantic pragmatics

(Levinson 2000: 188)

4. 関連性理論からの批判

Levinson は、関連性理論を Reductionist (縮小主義者) と呼んでいるが、and then などの複文の真理値決定の問題をすべて GCI で解決しようとした結果、Carston(2003, forthcoming)からの批判を招く結果になっている。

- (24) a. If each side in soccer game got three goals, then the game was draw.
b. If each side in the soccer game got *exactly three* goals, then the game was draw.
- (25) a. Because police have recovered some of the gold, they will no doubt recovered the lot.
b. Because the police have recovered *some but not all* of the gold, they will no doubt recover the lot.

Levinson(2000: 213-14)は、“the truth conditions of the whole expression depend on some of its constituent parts”の述べ、複文全体の真理値は、その部分の真理値で決まるとしている。つまり、(24a)の three は意味論的には at least three の意味であるが、GCI でそれ以上でないという Q 推意(at most three)が働いており、全体としては、(25b)のように exactly three の読みになる。それを復元して初めて、ゲームが引き分けになるという if 節全体の真理値が決定される。(25a)も同様で、some が some but not all へ復元されてしか、全体の真理値が決まらない。

ここまではよいのであるが、同じ複文の if 節でも PCI の意味復元には困ることになると Carston は言う。

- (26) Premise 1: If someone leaves a manhole cover off and you break your leg, you can sue them.
Premise 2: Someone left a manhole cover off and Meg broke her leg.
Conclusion: Meg can sue them.

Premise 1 と Premise 2 から、演繹的に、肯定式(modus ponens)を使って帰結を推論するのは、全く正しい。ところが、Levinson 流に言うところ、この推論はおかしいはずである。つまり、Premise 1 と Premise 2 の真理値が違ってくるためである。Premise 1 は (24)(25)と同じく if 節であるので、真理値は決まっているはずである、ところが Premise 2 の真理値は決まらずに推意のままである。そこから、帰結を持ってくるのは Levinson 流に考えるとおかしいことになる、と Carston は批判している。ただ、Premise 1 で GCI が関係しているであろうか。また、Premise 1 は関連性理論では、推意前提のはずであ

る。推意前提で、このように if 節の場合は、話し手が仮定しているだけで、たとえ受け入れられる前提としても、真理値に関与しているのかどうかは疑問である。

Q 推意は常に生じているのであろうか、という問いが、Grice 以来、常に問われている。Carston (1995: 220)があげている、Green(1995: 96-97)の例をみてみよう。²

(27) B: Are some of your friends Buddhist?

A: Yes, some of them are.

Green は、話し手 A は「友達の全員が仏教徒ではない」と知っていて、some of を使っているとは言い切れないとしてる。たとえ、全員が仏教徒であっても、あえて、仏教を盲目的に信じる groupie ととられたくないから、some of と尺度の低い方を使ったのかもしれないと述べている。

Carston は、これらの例をあげ、関連性理論の改訂(1995)年版の関連性による説明を試みているが、そもそも GCI は Grice の「協調の原則」の延長線上にあり、B は A が誠実に答えてくれることを前提として話を進めている。「うそ」や「気おくれ (diffidence)」はまた GCI とは別のとらえ方をしなければならない。また、第 2 に、GCI がトークンではなくタイプとしての推論から生じる推意と Levinson は位置づけている点が重要である。いわば、タイプとして潜在的(potential)に人間が備えている推論だとしたら、個々の場面でどの程度生じるのかは、程度問題であり、我々の言語知識の中にある、場面適応の原則(場面、場面による調整能力)との、かねあいをとりつつ考えていかなければならない問題であると思われる。

5. おわりに

このように、Levinson は GCI の優位性を強調しながら、様々な言語事実を説明しようとしている。特に第 4 章では、語用論の統語論への侵入という観点からも語られており、今後議論を呼びそうな領域である。この部分の批判については、Capone(2001)を参照されたい。また、意味論と語用論の綱引きに関して、関連性理論からの批判は Carston(2002)を参照されたい。なお、表題の Presumptive Meanings であるが、Levinson は、GCI を含めて言っているように思われる。「推論的意味、推定的意味」などが訳語として考えられるが、GCI そのものが推論、推定より、preferred あるいは default 的な意味として仮定されているため、「当然生じる意味」というような意味合いになるかもしれない。

注

*本稿の作成に当たっては、西山佑司先生（慶應義塾大学教授）、児玉徳美先生（立命館大学教授）、小泉保先生（関西外国語大学教授）によるご教授が大きい。感謝するとともに、不備な点はすべて評者にあることをお断りしておきたい。

1. Q 推意と I 推意の関係については、本誌、今井論文、中村論文を参照されたい。
2. その他、three などの数字を含んだ表現は、Levinson も扱いの難しさを論じている。

参考文献

- Capone, A. 2001. "Review: *Presumptive Meanings*. By Stephen C. Levinson. Cambridge, MA: MIT Press, 2000. Pp. xxiii, 480." *Language* 77:3, 578-580.
- Carston, R. 1988. "Implicature, Explicature, and truth-theoretic Semantics." In R. Kempson (ed.) *Mental representations: The Interface between Language and Reality*. 155-181. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carston, R. 1995. "Informativeness, Relevance and Scalar Implicature." In R. Carston and S. Uchida (eds.) *Relevance theory: Applications and Implications*. 179-236. Amsterdam: John Benjamins.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Carston, R. 2003 forthcoming. "Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction." In L. Horn and G. Ward (eds.) *Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/robyn/home.htm>
- Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. New York: Academic Press.
- Green, M. 1995. "Quantity, Volubility, and Some Varieties of Discourse." *Linguistics and Philosophy* 18, 83-112.
- Horn, L. 1984. "Toward a new Taxonomy for Pragmatic inference: Q-based and R-based Implicature." In D. Shiffrin (ed.) *Meaning, Form and Use in Context: Linguistic Applications*. 11-42. Washington DC.: Georgetown University Press.
- Horn, L. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: the University of Chicago Press.
- 児玉徳美. 2002. 「GCIをめぐる一—新グライス学派と関連性理論の比較—」『プログラム & アブストラクト 2002 (Program & Abstracts2002)』日本語用論学会第 5 回大会シンポジウム.

田中廣明

Grice, P. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. 41-58. New York: Academic Press.

Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.

Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

武内道子. 2002. 「海外言語学情報(4) 言語形式の明示性と表意」『英語青年』2002年7月号 (Vol. CXLVIII, No.4) . 36-37(240-241).